

第5学年体育科における「意味と内容」のひろがり

5年B組 石本 倫章

— 『ソフトバレーボール』の学習をとおして —

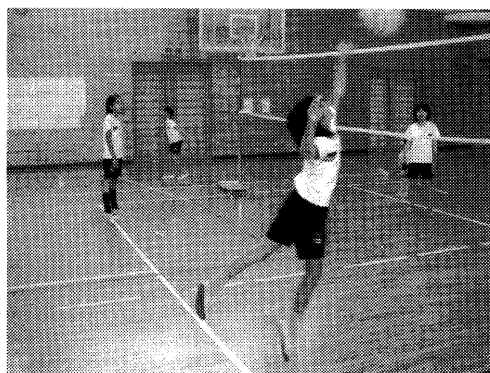
1 子どもに対するねがいと学習指導のねらい

ソフトバレーボールは、最近、小学校でも単元として取り上げられるようになってきた運動である。

この運動は、空中にあるボールを落とさずにつなぎあうという「緊張感」と、チーム一丸となりボールを相手コートにかえすという「一体感」が強く感じられる特徴をもつ。「緊張感」は、ネットによって隔てられているというバレーボールの特徴に起因する。

「一体感」は、相手コートにとりあえずかえすとい

う共通の意識がもちやすいことからうまれてくる。だから、それらは、他のボール運動にはない教材観だと考えた。



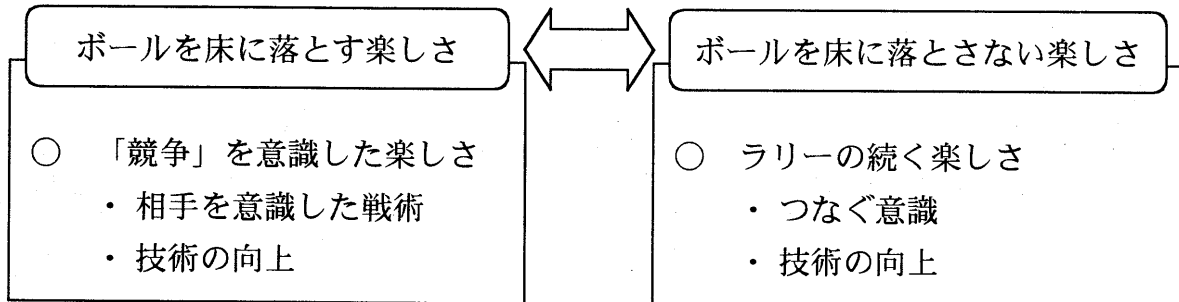
ボール運動の持つ機能的特性の柱は「競争」である。しかし、バレーボールで勝敗だけを強調したゲームはとても味気ないとわたしは感じていたの、「緊張感」と「一体感」をキーワードにすることにしたのである。それが、本実践の主張点とし、単元構成上大切にしたいことだったのである。だから、以下のような単元目標を設定したのである。

- ◎ 失敗を認めあえる雰囲気をつくりながら、ボールを落とさない「緊張感」を味わうとともに、相手チームに勝ちたいという願いを実現させようと、チームの仲間と考えたり、練習したりすることができる。
 - ◇ チームの仲間と一緒に、練習や試合を積極的にできるようにしようしたり、失敗にもめげずに力いっぱい活動したりする。
 - ◇ 相手チームに合わせた戦術を考えたり、チームの反省点やチームの仲間の良いところなどに気づいたりしている。
 - ◇ 自分の近くに飛んできたボールを打ち返すことができたり、チーム内でボールをつなぎあったりしながら、飛び込んでレシーブしたり、アタックをしたりする。

2 5年生の子どもがとらえた「意味と内容」

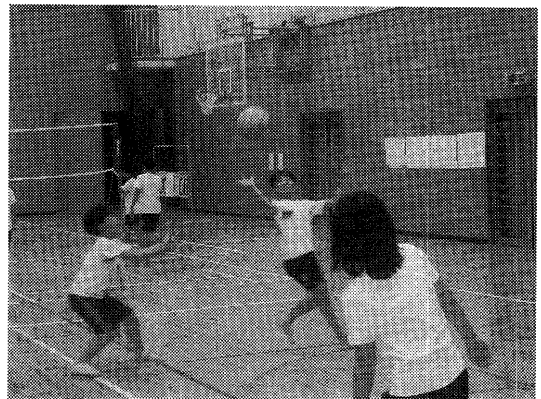
バレーボールの「意味」は、相手チームと勝敗を競いあう「競争」である。ほとんどの子どもたちはその楽しさを味わおうと、練習したり戦術を考えたり（「内容」）するだろう。また、本単元の主張点にも書いたように、相手チームとのラリーを楽しんだり、ボールを落とさないようにチーム内でつなぎあったりする「緊張感」と「一体感」が「意味」となっていくと考えたのである。

本実践での主張点を具体的に「意味と内容」をあらわす図にすると以下のようなになる。



本単元の「意味」を「競争」を意識した子どもたちの楽しさだけでなく、ラリーの続く楽しさとの2本柱にしたのは、わたしの意図でもあるが、子どもたちが獲得するであろう「意味」だと考えたからである。どちらもバレーボールの醍醐味であるので、それが味わえるようにはじめのルールの工夫を考えていったのである。

“ボール運動” = “競争”として固定的にとらえるのではなく、その運動によって弾力的に指導者が考えていかなければいけないのではないだろうか。その意味では、今回のように、2つの柱としたのは、単元構成をする上でも考えやすかった。



また、子どもたちが獲得する「意味」は他にもあったので、それを「意味と内容」がひろがる姿として次項でいうことにする。

3 「意味と内容」がひろがる場面

ここでは、着目児がひろげていった「意味と内容」について書いていくことにする。まずは、◇の学習実際からである。

彼女は、技術面が気になって、興味・関心・意欲が低い子どもでもある。だから、失敗しないようにするためにか、ボールが自分の方に飛んできて手を出さずとしない子どもであった。チームの子にとっては、手を出さずにボールが落ちてしまうので、失敗されるより不満の残る様子であった。それが、意欲的、積極的にかわっていったのである。それは、「競争」の楽しさを強く感じたからというよりは、チーム内の人間関係や技術が向上したという要素が強いように感じた。

彼女の感想を読んでもみると、総当たり戦の3日間は、どちらかというとなマイナスの感想であった。対抗戦がはじまって、触球回数を調べるようになったので、自分の失敗が分析的にわかるようになったときの彼女の感想文である。(要約)

誰が打ったかという紙をもらった。試合がおわると「ふみ×」と書いていた。失敗している。みんなが「ドンマイ」と言ってくれた。

この日から、彼女の活動の様子がかわっていったのである。ゲーム中は、少しずつボールをとろうとしたり、失敗を恐れないようになってきた。また、時間があれば気の合う子とボールにふれたり、チームの仲間といっしょに積極的に練習しようとしてきたりするようになってきたのである。

彼女は、バレーボールを楽しもうとしているのであるが、「競争」より「人との関わり」を「意味」として獲得したのではないだろうか。自分が失敗しても、同じチームの子が「ドンマイ。」と言ってくれた安心感が、彼女の獲得した「意味」なのである。だから、思い切ってできる素地ができたので、技術向上が彼女の課題(内容)になったのである。わたしがおこなった手立てというのは、休憩時間も使えるボールを用意したり、話し合いや練習が十分行えるような授業時間の計画をしたりといった物理的な条件整備と、直接的なはげましの声かけが中心であった。それが、彼女と彼女のまわりの子に影響力をもったかどうかはよくわからないところもあるが、休憩時間をふくめ、練習を活発におこなうようにかわっていったのであった。

次は、♡の学習の実際からである。

彼女は、わたしの見取り(当日資料「6 着目児」参照)どおりの学習の様子であった。彼女は、単元当初から、チームでつなぎあうことや相手とラリーすることを意識していた。彼女が書いた第1時の作文である。(要約)

最初はボールをつなぐ練習をした。つなぐには、下に打つのではなく、上に打つ。交代が難しい。いきがあった。

このように、最初からつなぎあうことでチームの子への声かけもできていたのである。また、第5時の作文からである。

調子がよくなかった。2試合目に取り戻した。声はでない。声にこだわっているわけではないが親しみをもてたらいい。ぶつかったり、遠慮したりするから。

彼女は、つなぎあうことの大切さを具体化するのに声をかけあうことの有効性に気づき、親しみをもてたらというように、声をかけあうことでチームワークがよくなることもわかっているのである。つまり、彼女の獲得した「意味」はチームワークなのであった。チームワークをよくする

ための「内容」として声をかけあうことの大切さを感じたのであろう。

以上の具体例は、一例であるし、限定的でもある。全体としての反省としては、技術向上の時間設定の必要性を感じた。45分の中に、練習の時間を配置したが、それだけでは不十分であった。これは、運動経験の不足ということが起因しているが、本単元でもっと大胆な学習計画が必要であったと感じた。

4 成果と課題

① 成果

今年度、“「意味と内容」がひろがる学びの創造”のテーマを受けて、“よりよく「競争」をたのしむために”というサブテーマを設けて実践してきた。

よりよく「競争」するというのを、教科提案で『学習として進化していく良い点と、人間としての粗野なところがクローズアップする悪い点の両方をあわせて学習すること』と言った。粗野なところに気づかせ、自省させていくといった道徳的な内容重視を言っているのではない。今年度は、5年生という学年と、穏やかな子どもたちだったということもあり、粗野なところが学習であまりクローズアップすることはなかった。だから、学習内容の進化に重点をいければよかったのである。一つの成果と言ってよいだろう。子どもたちは、今年度いくつかのボール運動を経験し、「競争」欲求を充足させてきた。どの単元でも、マナー重視の単元にならなかったのも、心の開放ができやすく、今もっている力を発揮できやすくなった。また、大まかな運動分類をして検証したが、間違っていなかったということがわかったのも成果としていえるのではないだろうか。

「ソフトバレーボール」の「意味」を2つの柱にしたのも成果だったと思う。それは、つなぎあうことが「内容」となりやすかったからである。

② 課題

今年度は、「競争」を強調した。体育科の年間カリキュラムをみると、他の領域の運動があるが、今年度は、それに研究の視点を当てなかった。例えば、器械運動や陸上運動といった個人学習の運動での「意味と内容」のひろがりをあきらかにしていない。

ボール運動のような、集団でおこなう運動は、個人のめあてとチームのめあての兼ね合いが必要になってくるので、個人のめあてが規制させることがおこってくる。例えば、ポジションは個人のおもいが優先させるより、チームの勝利が優先されることがおこってくるのである。しかし、個人の運動は自分のめあてが規制されることがないといってよいだろう。そこでの「意味と内容」は必然的に違ったものになってくるのではないだろうか。

来年度、個人学習の運動に視点を当てることが来年度の課題になってくるだろう。